山口瑞鳳編 『敦煌胡語文獻』 講座敦煌6

武内紹人

一

敦煌・中央アジア出土文獻の研究は現在再編成期にある。主要コレクションが一應の整理をみ、コレクションごとのシステムに基づく第一次的なカタログがほぼ出そろって久しい。そしてパリ、ロンドン、ベルリン、北京をはじめ主要コレクションの文書の大部分がマイクロフィルムないしファクシミリの形で研究者の利用に供せられるようになった。研究者は諸コレクションの文書を容易に比較研究できる條件が揃ったのである。いま我々が進めるべき仕事は、文書の個別的な研究はもちろんのこと、全コレクションを通じて文書を出土地、年代、書式、内容等の色々な視點から再分類してみることである。それぞれの切り口に應じて文書の様々な相が現れることが期待されるからである。それは敦煌・中央アジア出土文獻全體の性格の解明に寄與すると同時に、各々の文書の解讀の地盤を與えるはずである。漢文文獻については、一九七九年パリのコロックにおける藤枝晃氏の提唱[1]を受けた京戸慈光氏の發表（第三十一回 CISHAAN）がこの流れに沿ったものといえよう。

我々の次の課題は異なる言語の文書間の關係の解明であろう。Staël Holstein Roll を始め、一文書に複數の言語が書かれたいわゆる多言語文書や、他言語轉寫資料（e.g. チベット文字による漢語、ウイグル語の轉寫）等は早くから研究者の興味を強く引き相當研究が進んでいる。これらをより組織的に進めていくことも大事であるが、見落としてはならないのは單一言語で書かれた異言語文書同士の相互關係の研究である。周知のように、敦煌文書研究の初期に佛教文獻の解讀がいち早くすすんだのは、對照できる原典や他言語文獻があったからである。それに較べ俗文書では他言語文獻との比較は餘り行われてはいない。しかし今後の研究によって異なる言語の文獻間に文書形式を始め、内容においても一致ないし類似が見いだされる可能性は極めてたかい。例えば吐蕃支配下に書かれたコータン語俗文書とチベット語文書の間に術語や文書形式上の借用關係があったであろう事は容易に想定される[2]。從って今後俗文書を解讀するにあたっても他言語文書との關係を常に考えておく必要がある。そのような研究を進める際、我々にとってなにより必要なものは、自分の專門外である分野の文獻についての初步的にしてかつ學問的に信賴でき、アップトゥデイトでハンディな情報である。

このような狀況において、本書『敦煌胡語文獻』がようやく公刊されたことは、我々の渇をいやすものである。ここに敦煌胡語文獻についてのこれまでの研究成果が簡便な形でまとめられ、今後の文獻研究の道標になることが期待されるからである。

ただ本書では、編者がはしがきで述べているように各章の執筆者の方針を尊重し、執筆方針を敢えて規制統一していない。從って各論文は執筆者の問題意識を反映し、あるものは評者が冒頭に述べたような敦煌學的視點を、またあるものは例えばチベット學的な視點

を強く打ち出している。ここに敦煌學的視點というのは、文書をできるだけ「網羅的に」リストアップすることによって、そこに「何があるか」というだけではなく「何がないか」ということを確認することを通して文書全體の性格を探ろうという姿勢である。本書では、ウイグル語文獻、コータン語文獻、ソグド語文獻の論文はその方針で貫かれている。それに對しチベット語文獻の諸論文は、どちらかといえば佛教學的ないしチベット學的視點から書かれている。卽ちチベット史、チベット佛教等の各分野で興味有る文獻を抽出して紹介するという方針である。これは執筆者各々の問題意識の違いによるのみならず、對象とする文書の量、卽ちチベット語文書の數が膨大であるためと思われる。ただ評者自身は、今後チベット語文書についてもより敦煌學的視點からの研究が必要だと思う。ちなみに本書は講座の構成上敦煌文書に限り、トルファン、トルキスタン文書は扱っていない。これはある意味で足かせではあるが、敦煌と他の地域の間に出土地による文書の內容や形式の分布上の相違の有無を考える機會でもあった。例えばチベット佛教文書において、敦煌とトルファン出土のものの間に內容上の違いが「ある」或は「ない」ということを決定するのも重要な課題だと思うが、本書では特に論究されていない。

本書は講座敦煌の構成上、『胡語文獻』の名で非漢文文獻を總覽することが期待されている。但し、編者がはしがきで述べているように、現在の日本での研究狀況からして「胡語」のすべてをカバーすることはできなかった。具體的には、チベット語、ウイグル語、コータン語、ソグド語の文獻がカバーされ、その他の胡語卽ち、サンスクリット、トカラ語文獻（以上藏經洞出土）、西夏語、蒙古語文獻（モンゴル窟出土）についてはふれていない。編者はこれらの胡語文獻名に特に言及はしていないが、讀者は本書で概說された胡語文獻以外にも上述の諸語文獻が敦煌から出土していることに注意すべきであろう。これらの點を含めた編者による總序が附け加えてあればより親切であったと思う。

二

前書きが長くなったが、次ぎに本書の內容を紹介しよう。本書は大きく二部に分けることが出來る。第一部は、ウイグル語文獻、コータン語文獻、ソグド語文獻であり、第二部は、チベット語佛教文獻および非佛教文獻である。

第一部には次の諸論文が收められる。卽ち、ウイグル語文獻（森安孝夫）、コータン語文獻概說（熊本裕）、敦煌のコータン語佛教文獻（岩松淺夫）、ソグド語文獻（吉田豊）である。

森安論文は敦煌出土ウイグル文獻の總覽であるが、先ず最初に「十一世紀後半以降の敦煌文書」の章がおかれている。讀者には若干唐突に感じられるかもしれないが、この章はウイグル文獻のみならず敦煌文獻全體に關わる重要な問題を扱っているのである。卽ち敦煌文書の中にモンゴル期以降のものがまぎれこんでいることは、つとに Rona-Tas などによって論じられてきたが、[3] モンゴル期に造られた一八一、一八二窟（ペリオ編號）とそこに屬する文書の存在を森安氏がここで初めて明確に指摘したのである。この考えは既に百濟氏の論文（cf. 本書九八頁）に引用され、學界に知られるところとなってはいるが（cf.『史學雜誌』九四—五、二五四頁）、森安氏のオリジナルな論考がようやく公刊された事を喜びたい。

この事實の持つ大きな意味は卽座には理解されにくいかもしれないが、ウイグル文書のみならず敦煌文書全體に關わるものである。卽ち、著者が明らかにしたウイグル文書における「まぎれこみ」の存在は、當然他の文書、例えばチベット文獻にも當てはまるはずである。從って、例えば本書四一二頁沖本論文で、S34の著者プラジュニャーカラに關して、佛教後傳期の同名人との同定を敦煌文書であるという理由から沖本氏が否定しているのは當面妥當ではあるが、もし元朝以降の文書の「まぎれこみ」を想定すれば、同じ人である可能性も十分でてくる譯である。このように今後は敦煌文書の年代を考えるときには、それが「まぎれこみ」の文書である可能性を常に頭に置いておかねばならない。チベット文書においてはまだその存在が明確になっていないが、ペリオ自身がモンゴル期の窟でチベット文書も見つけたと言う以上(九頁)、新たな視點をもって見なおすことによってその存在が見いだされる可能性は高い。

私がここでこの點を強調するのは、いま敦煌・中央アジア出土文書の年代を考え直す時期に來ていると思うからである。例えば吐蕃支配期以降に書かれたチベット文書の存在が指摘され、チベット語が吐蕃支配期以降の河西、トルキスタンにおいて lingua franca として使われていたであろう狀況が次第に明らかになりつつある。(本稿一九八頁參照。なお、この意味において山口氏が本書五二〇頁注5でチベット語文書 P.t.1188 の年代を九四二年とする考え方を時代が遲すぎるという理由で避けるのは說得的ではない。曹氏歸義軍期に書かれたチベット語文書が相當數明らかになっている以上、曹氏歸義軍期にもチベット語が使用され、曹氏に續く西夏王朝下にも受け繼がれたと考えるほうが自然であろう(4)。これは使用言語とその地の支配民族との關係が單純ではないことを示している。つまりこれまでのようにチベット語文書は吐蕃支配期というように、歷史の流れによって文書の年代に機械的に枠をはめることはできないわけである。そうするとトルファン、トルキスタン出土文書の年代決定は更に困難になる。その場合やはり敦煌文書から抽出した文書の樣式的特徵、紙質等を基準にして文書の年代を決定していくことになろう。そのためには、まず敦煌文書の中から後期の「まぎれこみ」を取り除いておくことが必要になるわけである。

さて森安論文は、第二章で本來の藏經洞出土のウイグル語文書を簡單な解說を附して網羅し、第三章でモンゴル期の文書の一覽表の呈示と、その中の重要文書の解讀、更にそれらが出現した歷史的背景の研究を行っている。第三章が特に重要なことはいうまでもない。なお、二二頁の P.t.1292 についての森安氏の研究および Röhrborn, Maue 兩氏の研究が時を同じくして公刊されたことをつけくわえておく。(D. Maue & K. Röhrborn, "Ein buddhistischer Katechismus in alttürkischer Sprache und tibetischer Schrift," Teil 1 *ZDMG* 134—2 (1984) 286—313; Teil 2 *ZDMG* 135—1 (1985) 68—91. 森安孝夫「チベット文字で書かれたウイグル文佛教敎理問答 (P.t.1292) の研究」、『大阪大學文學部紀要』二五(一九八五) 一—八五頁)。〔毎日新聞、一九八六年七月二十一日付朝刊は、敦煌莫高窟第四六四窟よりウイグル文を含む壁畫が五〇㎡四方、九枚に分けて切斷され持ち去られたというショッキングなニュースを、一面トップで報じた。この四六四窟こそ、森安論文によってその極度の重要性が明示されたばかりのペリオ編號一八一窟であり、この事件が人類文化史上に與える衝擊の大きさは、實は新聞報道以

上のものである。」

コータン語文獻は、熊本論文、および岩松論文によって扱われている。熊本論文は主要なコータン文書を內容別に分け、各文書に對して簡潔な解說と研究狀況を與えたものである。特に世俗文書の章は、Emmerick の *Guide* にはない多くの有益な情報が含まれている。第一に強調したいのは、ソグド語文獻の吉田氏と共に、これまで日本で研究者がいなかった中期イラン語の分野において、世界の學問的水準を超える研究者をここにもつことができたという點である。從って、熊本、吉田兩論文に提示された情報は、これまでのように Bailey, Henning, Emmerick 等の研究（卽ち二次文獻）にのみ基づくのではなく執筆者自身の原典研究に裏付けられたものであるという點において正に「學問的に信賴でき」、且つ未發表の研究成果に關する情報も含まれている點で「アップトゥデイト」なガイドなのである。編者はしがきで述べられているように、本書の出版は不幸な事態によって相當遲れたが、そのために熊本、吉田兩論文を加えることが出來たのは結果的に本書の價値を高めることになった。

岩松論文は佛敎學者の執筆によるところに特色がある。ただ、岩松氏自身も述べているように、コータン語の專門家ではないため、現在のコータン學の成果を十分にふまえていない。例えば敦煌出土が明らかなコータン語文獻をスタイン本のみとする記述（一四二頁）は、現在では誤りであり、岩松論文に擧げられている以外に多くの敦煌出土コータン語文書が確認されていることも熊本論文を見れば明白である。『無量壽宗要經』に關する記述は詳しいが、コータン本 S2471 の存在については觸れていない。Bailey, 田久保氏等の研究に對する十分な批判も見られない。これらコータン語文獻の基本的事項については讀者は熊本論文を參照されたい。岩松論文はコータン語文獻全體をカバーするものではないが、數點の佛敎文書については佛敎學の知識を生かした詳しい記述があり參考になろう。

吉田論文は、敦煌出土のすべてのソグド語文書についての必要最小限な情報を極めて簡潔にリストアップしたものである（トルファン出土の文書については近く出版する豫定とのことである）。ただ說明がほとんど加えられていないのでみすごしてしまいがちだが、敦煌文書全體の性格に關するおもしろい情報がこの中の含まれているので、それについて注意を喚起しておきたい。

ペリオ本 P.8 およびスタイン本 Or. 8212/81 の裏面には、それぞれ表のソグド文の內容を示す題が漢文で示されている（一九一頁、一九八頁）。この漢文は今世紀に入って發掘後書かれたものとは考えられない。これらが完本ではなく fragment の裏であることに注目したい。また、P.3（一九〇頁）の文書は、pothi 四葉から成り、そのうち一葉はスタインコレクションに含まれる。（Or. 8212/80B）これは首尾缺の寫本であるが、それにもかかわらず正しい順序でペリオ、スタイン本を通して漢字で番號がうたれている。これも現代の書き込みとは思えない。そうするとこれは、藏經洞に運び込まれた際、あるいはそれ以前にこれらのソグド語の fragment（卽ち屑）に誰かがわざわざその內容を記し整理したということを示すものであろうか。また吉田氏は、註(12)（一九五頁）においてソ

グド語の禪宗文獻の存在を示唆しているが、それと關連して、最近大谷コレクション中に禪宗に關係の深い法王經のソグド譯（但しトルファン出土）があることを發見したことを附け加えておく（『オリエント』第二八卷第二號一九八六年三月）。

三

第二部は第一部とは異なる方針をとっている。文書を網羅的にリストアップするのではなく、テーマごとに關連の敦煌文書を紹介し問題點を論じるという、より論文集的な構成である。

さてチベット語佛教文獻については、唯識文獻（袴谷憲昭）、佛教綱要書（松本史朗）、中觀系資料（齊藤明）、タントラ經典（平松敏雄）、寫經事業（西岡祖秀）、律文獻（沖本克己）、吐蕃譯經史（原田覺）の諸論文が收錄されている。これらのテーマの選擇の基準や順序については特に說明が與えられてはいない。ただ敦煌チベット佛教文書にはこれ以外の系列のものはないのか、例えば有名な禪文獻は、というような素朴な疑問も湧く。テーマの選擇はおそらく本講座の他の卷との關係も考慮して決められたもの（チベットの禪文獻については第八卷『敦煌佛典と禪』に沖本克己、木村隆德氏の論文がある）と思うが、できれば編者山口瑞鳳氏によるチベット文獻全體の總括的說明が欲しかった。佛教文獻に關する論述の內容についての評價は評者の及ぶところではないので、以下特に氣付いた點のみを記す。

袴谷論文は、現在一番手のつけられていない敦煌の唯識文獻をまずひとつひとつひろいだすという基礎的な作業を試みた力作であり、舊新譯語についての興味有る議論が隨所にみられる。

松本論文は、敦煌チベット文獻中五點の綱要書を譯し、それらを後代の Grub mtha' 文獻並びにインドの綱要書と對比して問題點を論じ、更に mdo sde pa'i dbu ma, rnal 'byor spyod pa'i dbu ma の二術語について新解釋を提出している。この解釋については、袴谷論文でも言及されているが、既に松本氏の別の論文で知られ學界の反響を呼んでいる（e.g. 梶山雄一「チベット學說綱要書の諸問題」、西田龍雄編『チベット文化の總合的研究』昭和五十八年三月京都大學文學部 二一—三六頁）。綱要書の譯については文獻a (Pt. 116)のみを原文と對照したが、チベット文の解釋に若干の疑問點があるので以下に掲げたい（↓の後に示したのが拙案である）。二六七頁一五行「人と我は無い」gang zag la bdag ma mchis ↓「人において我は無い」；同一六行「どこにも法しか存在しない」[chos] yang chos tsam du ni ma mchis ↓「法も法のみとしては存在しない／法も法としてしか存在しない」；二六八頁五—六行「法にも色の蘊以外に我は無いと理解し」chos la yang gzugs kyi phung po tsam du bdag myed par rtogs te ↓「法においても色蘊のみが無我であると理解し」。評者は佛教チベット語には門外漢なので思わぬ誤解をしているかもしれないので、松本氏のご教示を乞う。

齊藤論文では、『修習次第』ペリオ本が、中間部分が缺落した（卽ち當時旣に缺落していた）スタイン本を筆寫したものであるという指摘（三三五—三三八頁）が非常におもしろい。

平松論文では、最初にチソンデッェン王による佛教導入の經過がタントラとの關係を中心に大膽に槪觀されている。ただ準據する資料として、羽田野、松長兩論著が擧げられるのみで一次資料には言

及がない。その論點が一次資料によって直接裏付けられたものか、或は準據した論著の推論結果に依るものかの別（一次資料がある場合にはその文獻名）を明示しておくのが良心的であろう（それが既に學界で定説となったものでないかぎり）。敦煌の密教は、漢文、チベット文ともにまだ研究が十分進んでいないが、密教經典の成立年代等にも關連して今後の進展が最も期待される分野である。

西岡論文は、吐蕃支配期の敦煌における『無量壽宗要經』、『大般若經』を中心とする寫經事業の解明を目指したもので、トーマスが紹介した寫經關係文書の優れた新譯を提出している。この極めて大規模な寫經事業の實態については、上山大峻氏も研究中と聞くが、特に寫經生の組織を中心に今後の解明が待たれる。また歸義軍期の寫經、譯經の實態——例えば『法王經』（チベット文）、『阿彌陀經』（漢文、チベット文字）等——についても研究が望まれる。寫經生および校勘者については、既に各コレクションを通したリストを作り得る狀況である。ここで興味を引くのは、寫經生および校勘者の名前である。これらの名前はその構成から次の四タイプに分けられる。

(1) 姓名がチベット語のもの
(2) 姓名が漢語のもの
(3) 姓が漢語で、名がチベット語のもの
(4) 姓が漢語で、名がチベット語、漢語以外のもの

(1)は純粹のチベット人で少數である。大多數は(2)—(4)即ち漢語姓をもつものである。これらの漢語姓は西岡氏が比定している（Sag 索、Cang 張、'Do 杜〔?〕、Li 李、Wang 王、Bam 氾）以外にも相當數が比定可能である。例えば、Leng ho 令狐、Je'u 曹、Lyang 梁、Kang/Khang 康、Hwa 何／華(?)、Im 陰、Byi 米、De'u 竇、Kong 孔、Cing 鄭、'Gu/Gu 吳／伍、Pe'u 包(?)。興味があることに名に tse の構成素を持つものが極めて多い。

(ア) 'do tse, hyen tse, hin tse, ham tse, i tse, weng tse,
(イ) lha tse, sha tse, shing tse, son tse, kun tse, man tse,

この tse は、チベット語の tshe「時」ではなく、漢語の「子」の音寫であろう（'do は「奴」か）。(ア)群のものは第一構成素も明らかに漢語である。しかし(イ)群のものには lha tse のようにチベット語と漢語を續けたとみなせるものもある。これらは(2)と(3)のタイプの中間に位置すると考えられよう。これら乃至(3)、(4)のタイプの姓名をもつ者は、敦煌住民の複雜な民族構成を解く手がかりになろう。

四

第二部の後半は、非佛教文獻の概説であり、編者山口瑞鳳氏による俗文書およびボン教文獻の概説と、今枝由郎氏による中國・インド古典のチベット語譯、翻案の章が收められている。古チベット語俗文書の概説は初めての試みである。俗文書の整理分類は、敦煌・トルキスタン出土チベット語文獻全體を概觀するためにも極めて重要である。さて本書では、俗文書として「チベット史文獻」、「史傳文學」、「官文書と公文書」、「私文書」、「吐蕃支配期以後の諸文書」、「法律文書」、「占い手引書」、「醫療文獻」の章がおかれている。

山口氏は、講座としてわかりやすくするため上記の各ジャンルから興味深い文獻をとりだし、出來るだけ多く翻譯紹介する方針をとっている。從って、文書の分類の基準（これら以外のジャンルの文獻の有無）、文書の書式、研究狀況等の詳細については特に記され

ていない。俗文書の分類は、色々な觀點から行うことが可能であるが、一つのやり方は、書式に基づいて文書を分類することである。例えば、手紙文書、契約文書、會計文書、占い文書等は、他と區別される明確な文書形式を持ち、また書式によって更に下位分類される。[5] このように文書形式の分類を通して、チベット文獻に內在する分類基準を明らかにしていくことが最も重要であろう。

さて上述したように、各章では多くの文書が翻譯紹介されている。その多くは山口氏自身あるいはバコー、トーマス等によって既に譯出されているが（特に「チベット史文獻」、「史傳文學」の章）、ここで初めて譯出される文書もある（特に「私文書」、「歸義軍期」、「醫療」）。これらはいずれも既譯を大きく改訂した優れたもので、現在最高水準のものであることは疑いない。ただ、一見さりげなく譯出されているように見えるが、實は現時點では未知の語彙を多く含んだ難解な文書を、背景に對する深い理解とチベット語學の知識に基づく推論で補った苦心の譯である。從って、山口氏自身も述べているように（四五二頁）、難解な語句の解釋にはまだ疑問の餘地が多く殘されているのも事實である。ここでは煩雜な注記を避けているため、如何なる經路をたどって本書の譯が案出されたのか評者には理解できない箇所も多い。それら全てについて評者が別案をもっているわけでもなく、ここで多くを論ずるのは煩雜にすぎるので、以下に若干の例を擧げ私案を述べるにとどめたい（→以下が私案とその理由である）。

(ア) 四五四—四五五頁「王統表」：「天から(降った)……その御子は、」gnam lhab kyi bla na / yab lha bdag drug bzhugs pa'i sras / →「廣大な天の上にヤプラ・ダクドゥク（父神である六主）がまし

ました。その御子が」。lhab は辭書では「廣い」の意味である。私譯では、ヤプラは天上にいることになる。その方が以下の文に示される、「その孫 Khri nyag が初めて地上にお來しになった」という記述にあう。：「ティー・ドゥンツィクの御子は……地父たる鎭めとしてお來しになったのである。」khri 'i bdun tshigs kyi sras / khri nyag khri btsan po // sa dog la yul yab kyi rje / dog yab kyi char du gshegs so / →「ティー・ドゥンツィク（七人の節）の御子（である）ティ・ニャクティ・ツェンポが、地上（?）における國父（達）の主（卽ち）地（上における國）父（達）の支配者としてお來しになった。」屬格が「たる」の意味にならないと思う。sa-dog は、山口氏に從って「地上」としたが、評者にはまだ不詳である。：「プー（カム地方）の迎え入れた六侯」Bod kag.yag drug →「ボェ（中央チベット）地方の六（四）のヤク」。山口譯は非常に魅力的ではあるが、何故そうなるのかわからない。私譯は直譯である。その場合、「ヤク」は暗喩と考える。Bod（と附國）をカム地方とする考えは評者にはまだ疑問である。山口說は多くの論據に基づくもので、ここで簡單に論ずることはできないが、單純に考えて、例えばこの引用文において、Bod＝カム地方の記述でツァンポ江およびヤルラ・シャンポを各々川と山の代表とするのも不自然に思える。

(イ) 四六七—四六八頁：「河、河、……嬉しい」chab chab ni pha rol na // yar chab ni myi 'i ni myi bu ste / lha 'i ni sras po bzhugs // rje bden ni bkol du dga' / sga bden gyis ni bstad du dga' →「河、河の彼方に（／力（の）河の彼方に）、ヤル（ツァンポ）河の彼方に、人の子であって、神の子であられる、眞

の主（が）支配するのは喜び、眞の鞍が上に乗るのは喜び。」ここでは、古チベット語の詩の技法である對句の形式が用いられ、二句がほぼ同じ意味を繰り返している。従って、第五句は拍數のために具格が省略されていると考えられる。これは、『年代記』第四章で同じ事が rje bden gyis ni bkol to / sga bden gyis ni bstad do /「眞の主が支配した。眞の鞍が上に乗った。」と表現されていることによって支持される。また第一句では、chab「河／力」の掛け言葉を用いて、二重の意味を表している。これは次例でも同様である。

(ウ) 四七〇—四七一頁：「御政道は……ムントレである。」chab chab ni pha rol na / yar chab ni pha rol na / dgu gri ni zing po rje / nya las ni kham du bkod / kham las ni rmeg du bta' / skyi nas ni nya 'don pa / dbyi tshab ni pangs to re / klum na ni chab gchod pa / tseng sku ni smon to re /→「河、河の彼方にて〈／力の河の彼方にて〉、ヤル（ツァンポ）河の彼方にて、グティのジンポルジェが、魚から切身〔一口大〕にされ、切身から無にされた。キチュ河から魚をとるのは〈／〔ジンポルジェの〕筋肉から筋をとったのは〉、イッアプことパントレ。ルムの地で河をせき止めたのは〈／〔敵の〕力を分斷したのは〉、ツェンクことモントレ。」同じ對句形式をとり、二句と九句の chab「河／力」、七句の skyi「キチュ河／筋肉」、nya「魚／筋」が掛け言葉として用いられている。

(エ) 四六九頁：「鳥トをして」bya gchod ching →「〔敵の〕行動を分斷して」。上例 chab gchod pa と對比すると、このように類推できる。

以上は、「チベット史文獻」の章である。この章では、資料を縦横につなぎあわせて、吐蕃王朝成立史が浮き彫りにされている。次の「史傳文學」の章は、同じ資料の中で文學的に價値のあるものを紹介している。古チベット語の文學には、詩、韻文が重要な比率を占めている。古チベット語の詩の形式、およびそこに用いられている（上述したような）對句や掛け言葉、（動物や山河を用いた）暗喩、反復、擬音・擬態語などの技法についての指摘があれば有益であったと思う。[6]

以上の二章がいわば意圖的に編集された文獻を扱っているのに對し、以下の章は狹義の文書 document の解說である。「官文書と私文書」の章では、お上からの通達文書を重點的に解說している。通達の發信源として、王宮、「デの大臣」の政廳、大軍團があるが、それらの間の關係は從來明確ではなかったのをここで極めて明快に提示されているのは大きな貢獻である。譯についての若干の私見は以下の通り。

(オ) 四九二頁：「お上の役人の神聖な恩義のお蔭で我等 lho bal も立って行けるのであっても」rje blon 'phrul gyi // bka drin la / bdag cag lho bal mgo mtho mthos kyang /→「神聖なお上の役人のお慈悲に（對し）、我々蠻人（も）頭を上げて（お願いしますが）」。山口譯は、mgo mtho mthos を mgo thon pa「能自立」(Chos-grags, p. 156) と關連づけて解釋したと推測するが、拙案では、mthos = mtho-bas (Chos-grags, p. 358) と解した。lho bal については、H. Richardson, "Bal-po and Lho-bal" *BSOAS* XLVI—1 (1983) 136—8 および拙論 "On the Old Tibetan Word Lho-bal" *Proceedings of the 31st CISHAAN* vol. 2 (1984) 137

—8 参照。「そのよう〔なお許し〕に敕印を賜りたいと大宰相が云う。」'di bzhin du phyag rgya stsol cig ches // zhang lon chen po i mcid /→「その〔lit. この〕ように〔許可する〕敕印を與えよという大尚論の文書を」。

(ゐ) 四九三頁：「前借りの部落間の交換と受領」snga skyin sde rjes→「以前の貸し分と利子」。詳細は、Ch. Fr. 67 の拙譯があるので、それを參照されたい。(註(2)拙論 pp. 391—392)

「吐蕃支配期以後の諸文書」の章で扱われている文書は、吐蕃支配期以降の河西においてチベット語が lingua franca として廣く用いられていた狀況を示し、チベット文獻の年代を考え直す必要を示唆する重要なものである。これについては、ウライ氏が先鞭をつけ、評者も若干の資料を加えたが[7]、ウライ氏は昨年の International Tibetan Seminar でもこの問題に關して發表を行ったと聞く。現在この時期に屬すると考えられる文獻は以下のようであるが、今後更に見いだされるであろう。P.t. 44, 984, 1003, 1081, 1082, 1106, 1120 v, 1124, 1125, 1129, 1131, 1188 v, 1189 r, 1211, 1212, 1220, 1225, 1256 v, 1284. II, III, 2105, 2111; Ch. 73 iv 14; VP C 130; 北京本北一八二號（皇四十七）v., Staël Holstein Roll.

與えられた紙面を既に超えているので、他の章については論評できないが、難解な文獻をこのように平易な形で我々に提供して下さった山口氏に感謝するとともに、これが今後の我々の研究の道標になることを改めて強調したい。本書では主要な文獻のみが取り上げられているが、その他にも千字文、九九算表、文字の練習等のジャンルの文獻があることを附け加えておこう。

今枝論文は、佛典以外のインド古典（ラーマーヤナ）と中國古典（『尚書』および『戰國策』）のチベット譯についての簡潔な解說である。中國古典からの借用としては、他にポン敎文獻 Gzer-mig の中に孔子が三人の童子に會う話が用いられていることがサムテン・カルメ氏により報告されており[8]、また、『チベット年代記』の中に『史記』中の一挿話の翻案があることを評者が報告している[9]。これらの中國古典からの借用に共通して見られる特徵は、佛典翻譯とは異なり、非常に自由で、翻譯というより翻案というべき形式をとっていることである。このことはそれらの作品を書いたチベット人が中國古典に相當通曉していたことを示すものであり、從って今後更に中國古典の翻案が見いだされる可能性は高い。

五

チベット語のカタカナ表記に就いて氣になる點がある。當時の發音が確實に再構成されていない現時點においては、固有名詞も現代ラサ、中央方言の發音に準じてカタカナ表記するのはやむをえない。ただ現代語の發音を表そうとして時に誤った方向に向かうこともあるようだ。例えば、本書では blon ルン、'gos グー、bod プーのように、-on, -os, -od の -o を「ウ」で寫している。この方式は現在定着しつつあるようである。これは、o が「前舌化」した音であるのを示そうとしているのは明らかであるが、前舌化した o は、いわば「オ」と「エ」の間であって、決して高舌化して「ウ」や「イ」に近くなってはいない。從ってそれを寫すには「オ」乃至「オェ」を用いるほかなく、このように「ウ」を用いるのは實際の發音からより離れるだけであるからやめるべきである（この方式で

は、ボン教 bon もブン教と表すことになる)。

なおチベット語のローマ字轉寫方式に關していえば、本書をはじめ東京では「北村・ワイリー方式」とよばれる方式が定着しつつあるようである。ワイリー氏の方式は、T. Wylie, "A Standard System of Tibetan Transcription" *HJAS* 22 (1959) 261—67 で示され、また北村教授の方式は、北村・西田「チベット文字轉寫とチベット語表記」(『日本西藏學會會報』第七號一九六〇年)で提出されている。しかし兩者を統一した「北村・ワイリー方式」を提唱した文獻の存在を評者は知らない。ワイリー、北村・西田兩方式は、a-chun の表記を除き基本的に一致するので、便宜的に兩者を統合したものと想像する。しかし、「北村・ワイリー方式」では、ワイリーがはっきり否定し(評者もそれに同意する)、固有名詞の第一音節の基字を大文字にする方式がとられている(北村・西田論文でもこの方式はとっていない)。從って、これは單なる折衷ではなく新しい方式であるから、それを提唱した文獻があるはずであるが評者は寡聞にして知らないので御教示願いたい。

イタリックにすべき箇所を下線で示しているものがある(齊藤、平松論文)のは、印刷上の不統一である。文獻番號および引用文獻の書式も若干不統一である。

最後に、氣付いた誤字・誤植を擧げておこう(表示は頁・行數)。

一二〇・九　普願→普賢／一二一・一三　註(66)→註(16)／一二六・四、一二六・四、一二九四・八　述語→術語／一二六・三　四文獻→五文獻／一二六八・一一　sangs rgyas→sangs rgyas／一二四・一　するもの否定→するものを否定(?)／一二五・七　存在するとは成立しない(文意不明?)／一二九六・一五　特種→特殊／三五一・三　チックデン王→チックデツェン王／三六三・一四　困→因／三六四・一五　Y五〇八→V五〇八／三六五・一二　semsngid →sems nyid／三七八・七　Lárt→L'art／三八〇・三　七四四年→八四四年／四〇四・五　末→未／四〇五・二　城→域／四〇五・一四　對稱表→對照表／四六〇・三　妄→妾／四六九・一〇　gNam ri slon mtzhan→gNam ri slon mtshan／四七一・一六　ソ→ゾ／四七六・一七　ティデ・ツクツェン→ティツクデツェン／四七七・九　baun → bdun／四七九・二　孟春→仲春(?)／五一三・二　dPal mgon→dPal 'gon／五二〇・三　大臣が→大臣／五六八・一一　規を一にする→軌を一にする。

註

(1) Cf. "Une reconstruction de la《Bibliothèque》de Touen-houang," *JA* CCLXIX (1981) 65—68.

(2) 例えば、山口瑞鳳編『チベットの佛教と社會』(春秋社、印刷中)所收の拙論「敦煌・トルキスタン出土チベット語手紙文書の研究序說」第七章參照。

(3) "A Brief Note on the Chronology of the Tun-huang Collections," *AOH* XXL (1968) 313—316.

(4) 西夏王朝下のチベット語使用については、西田龍雄「西夏語佛典について」(『續シルクロードと佛教文化』昭和五十五年)、E. I. Kychanov, "From the History of the Tangut Translation of the Buddhist Cannon," in L. Ligeti ed. *Tibetan and Buddhist Studies* (Budapest, 1984) 參照。

(5) 手紙文書の書式の分類は、註(2)の拙論を參照。

（6） 簡単には，『民俗通信』三三（一九八六年七月）掲載の拙論「チベット語の言葉遊び」を参照。

（7） Uray, "L'emploi." (本書五一〇頁註1)，T. Takeuchi, "A Group of Old Tibetan Letters Written under Kuei-i-chün," (Bicentenary Csoma de Kőrös Symposium, [Visegrád, 1984]).

（8） Samten G. Karmay, "A gZer-migVersion of the Interview between Confucius and Phyva Keng-tse Ianmed," *BSOAS* 38—3 (1975) 562—580 および M. Soymié, "L'entrevue de Confucius et Hiang T'o," *JA* CCXLII. 3—4 (1954).

（9） Tsuguhito Takeuchi, "A Passage from the *Shih chi* in the *Old Tibetan Chronicle*," in B. Aziz and M. Kapstein eds. *Soundings in Tibetan Civilization* (New Delhi, 1985).

一九八五年八月　東京　大東出版社
A5版　五七三頁　七八〇〇圓